

## 「とんさい」の亀公

むかし、上手渡の古屋に頓才にとんだ気転のきく人がありました。此の人は幼名を亀治といい、下手渡立花様のお屋敷に出入しているうちに、その頓才を認められ、殿様に亀公、亀公と可愛がられました。殿様が九州三池に行かれる時に、亀公（長じて、沢右衛門と改名してからも殿様は、亀公、亀公とお呼びになった）を呼んで、「亀公、此度九州に行かねばならなくなりましたが、長い道中なので亀公が側にいてくれないと、道中淋しくてならない。どうだ伴をしてくれぬか。」といわれたので、亀公は日頃のご恩に報いなくてはと、喜んでお伴をした。

五百里に余る道程なので、亀公は道々殿様を慰めることを忘れなかった。

道中恙なく九州三池に着いたのは十二月だった。亀公が何時も面白いことばかりいつているので、三池の侍が「亀公、お前の方では、梅の花は何時咲くか。此処では、今咲いているよ。」といったので、亀公はさすが「おらの方では、三月に咲くぞい。」三月は十二月よりも早いとの意味であった。

又「手渡は、どんな所か」との問いに對して「オラガ方はない、江戸、手渡、京都と行って三ドだぞい」といった。九州侍も亀公には「カナワナイ」と亀公の気転に舌をまいた。この外にいろ／＼頓智のよい話が今もなお、里人に語りつがれている。